

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 24 年度 第 1 号 2012 年 9 月 28 日

地方独立研究法人 北海道立総合研究機構
栽培水産試験場 調査研究部

道南太平洋スケトウダラ資源調査（産卵来遊群分布調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：平成 24 年 8 月 28～31 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500m の海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期をやや下回った
- ・ 魚群反応は胆振～日高沖が中心
- ・ 反応の比較的強い水深は 350m 付近（昨年よりも 50～100m 深い）
- ・ 漁獲物は、尾叉長 35～50cm（主体は尾叉長 40～45cm）
- ・ 水深 100～250m の水温は平年よりもやや高く、スケトウダラに好適な水温環境は昨年度よりも深みに形成されていた

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広い範囲で観察されました。その中でも、胆振海域の 176、179 海区および日高海域の 168、170 海区に比較的強い反応がみられましたが、ここ数年（平成 21～23 年）反応が強かった胆振沖の 185 海区については、ここ数年ほど強い反応はみられませんでした。また、渡島海域については 189、193 海区で昨年同期を上回る反応がみられました（図 1・2）。
2. 海域平均の反応量は、昨年同期をやや下回りましたが、金星丸でこの調査を開始した平成 13 年度以降では平成 21～23 年度および平成 16 年度に次ぎ 5 番目に高い値となりました（図 3）。
3. 魚群反応は、水深 150～500m の範囲に観察されました。とくに水深 350m 付近に比較的強い反応がみられました。（図 4）。
4. トロール調査の結果、水深 200～300m の反応はスケトウダラ成魚が主体となっていました。漁獲物の体長組成は、尾叉長 35～50cm（主体は 40～45cm）となっており、昨年同期よりもやや大型個体（45cm 前後）の割合が高くなっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温は、水深 100～250m 付近にかけて平年（この調査が開始された平成 14 年度以降の平均値）よりもやや高く、5℃以下の水温も 200m 以深に形成されており、平成 21 年以降では最も深くなっていました（図 6）。
6. 漁場の水温や水深別の反応量から判断して、漁期始めは昨年度よりも深い水深 300m 付近に主漁場が形成されると推測されます。また、漁場の水温が高いことや魚群の反応が昨年同期よりも日高側に多いことから、産卵場付近に来遊する時期は昨年よりもやや遅れる可能性が考えられます。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11 月）の状態を予測するために実施しているものです。12 月以降の状況は、11 月下旬に実施する分布調査により予測する予定です。調査終了後にまたスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

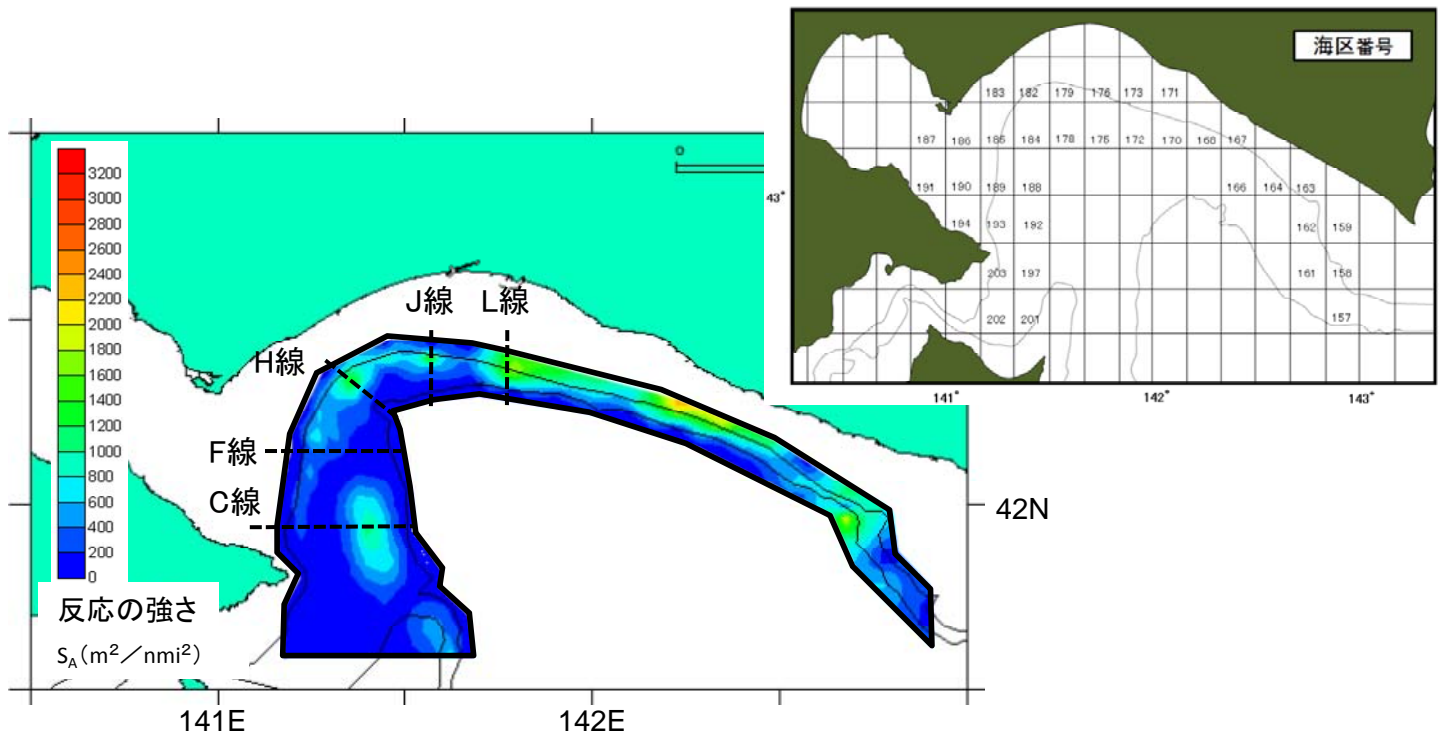


図1 調査海域における魚群の分布

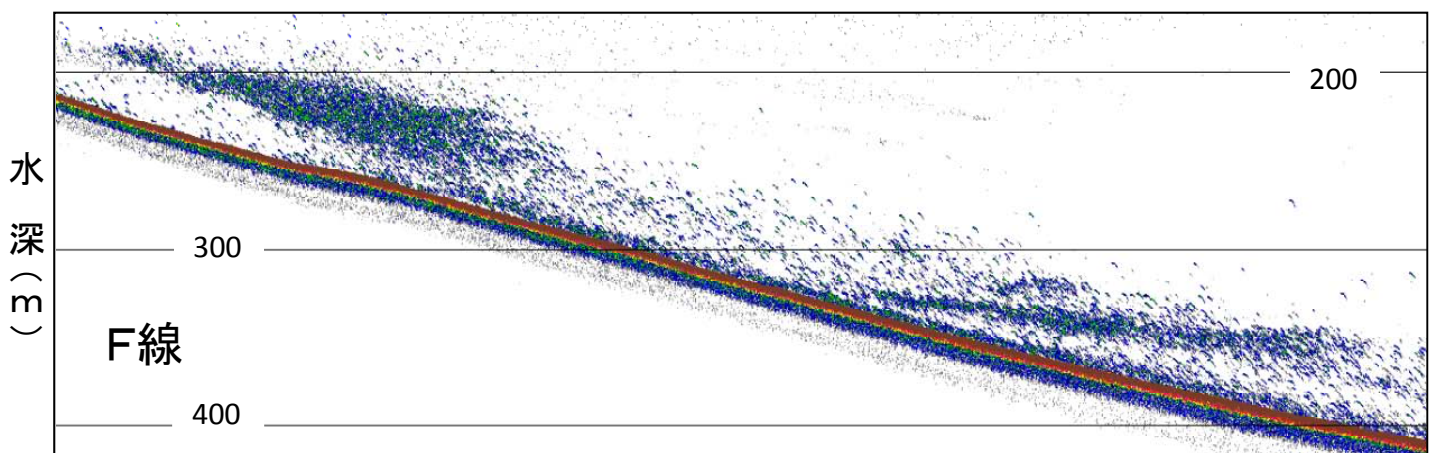
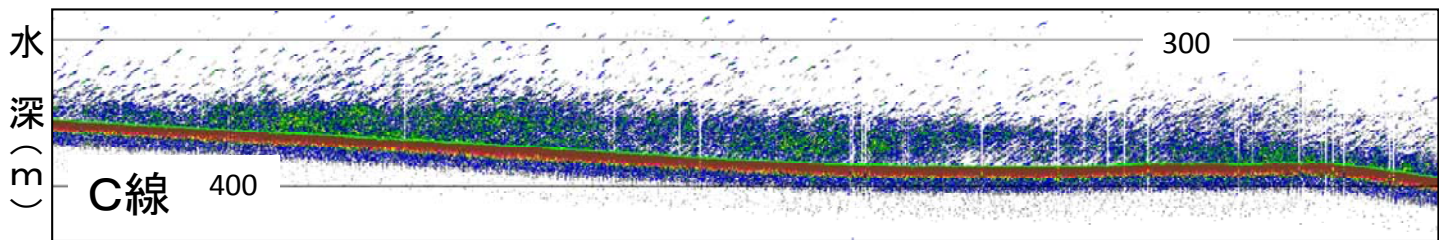


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

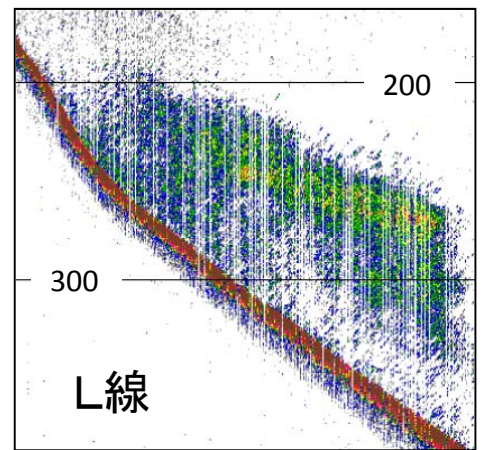
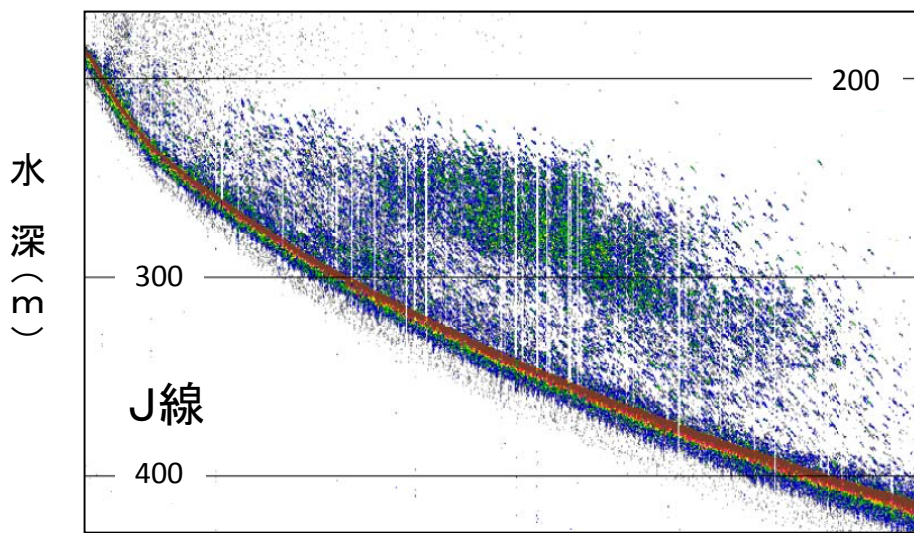
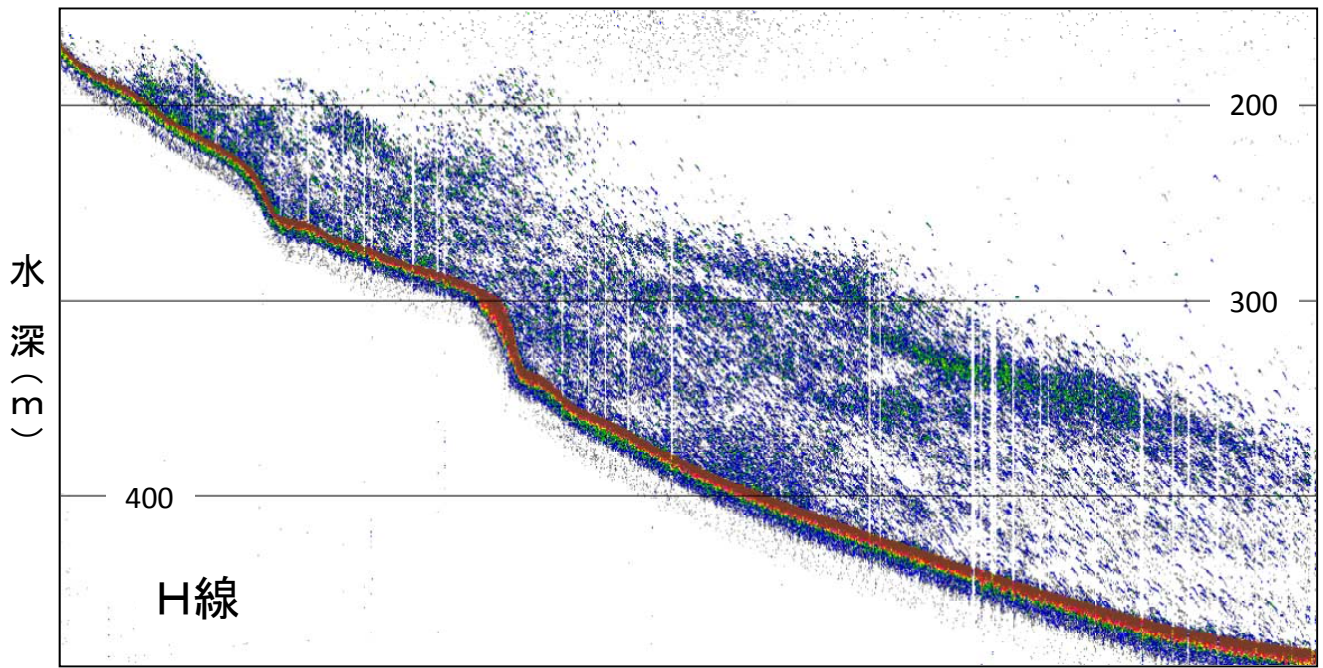


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

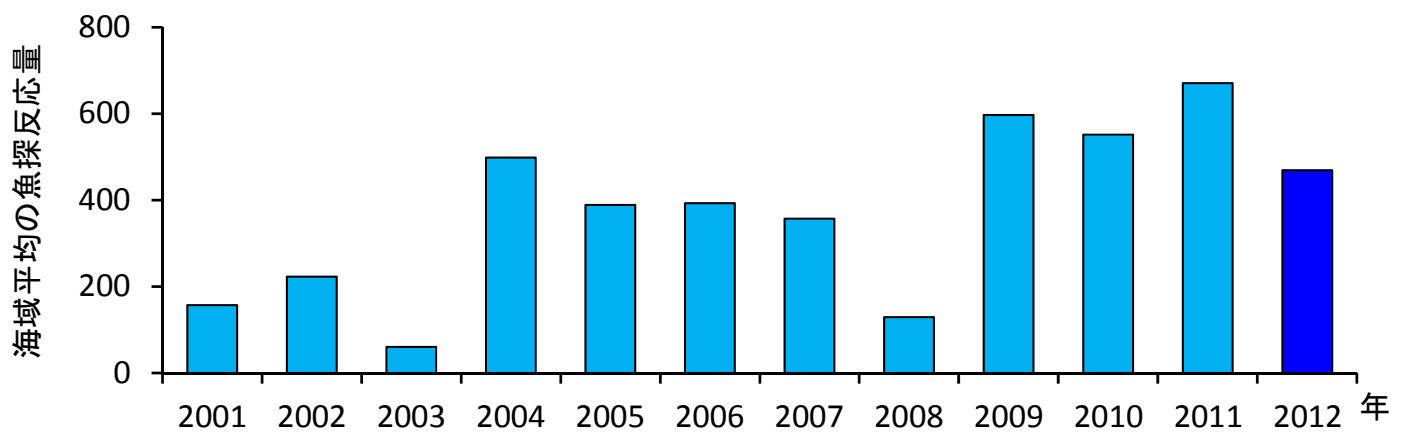


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

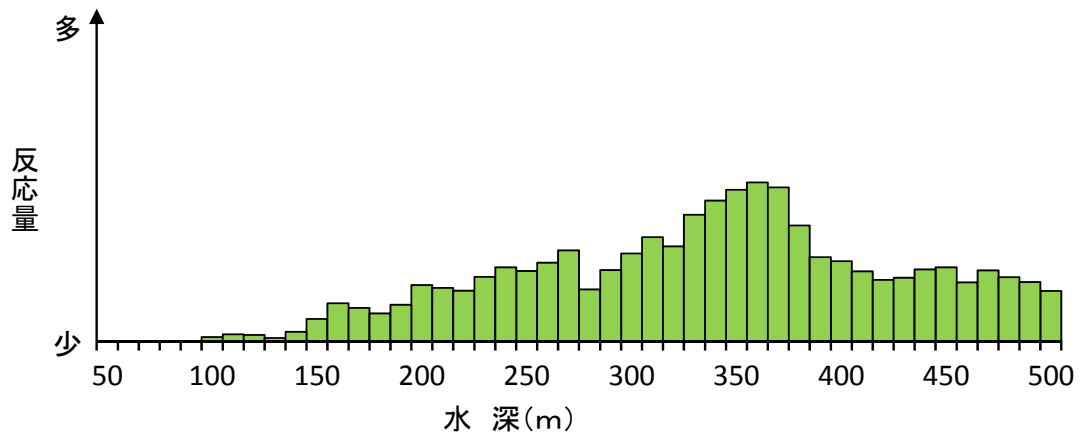


図4 水深別の魚探反応量

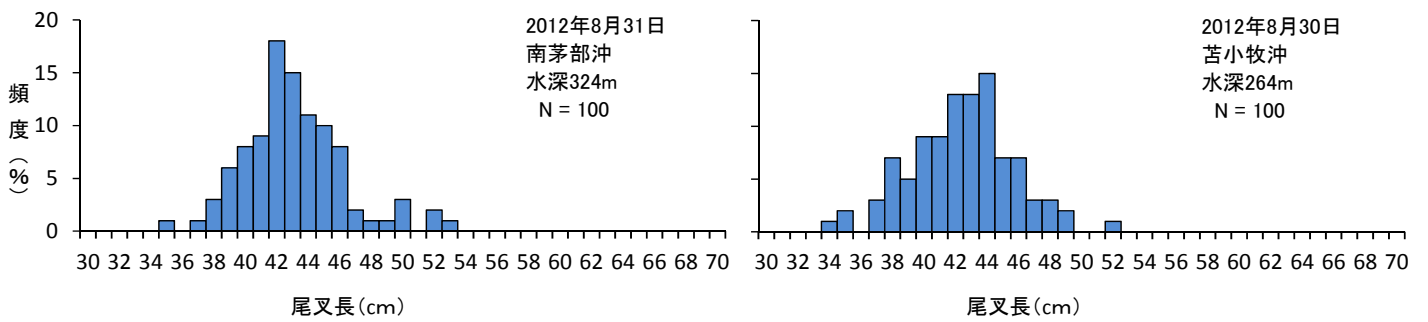


図5 漁獲物の体長組成

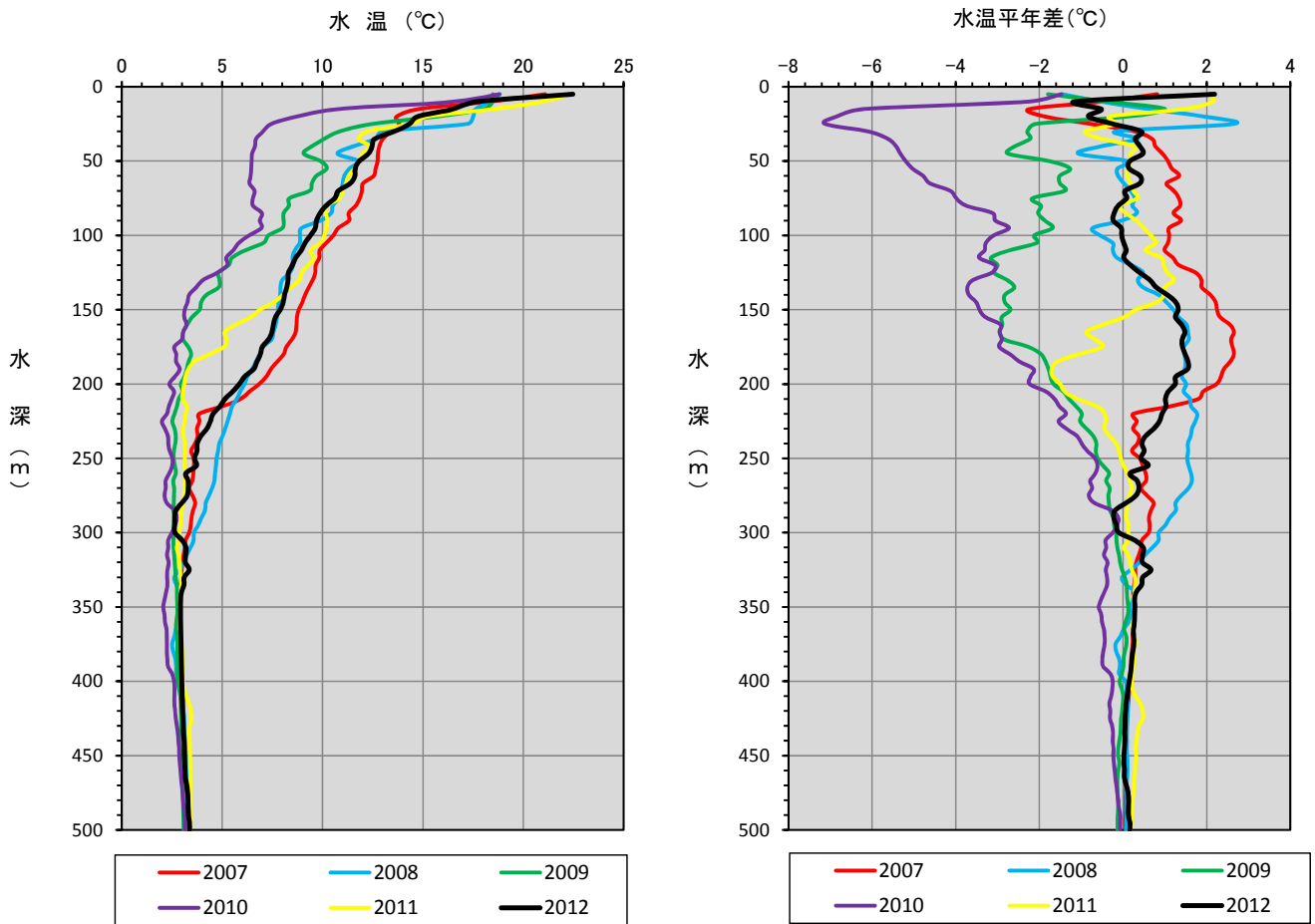


図6 水温の鉛直分布 (8月下旬:登別沖)